

お約束  
考現学



O Y A K U S O K U !

泉 麻人

SB文庫

---

やくそく こうげんがく  
「お約束」考現学

2006年7月7日 初版発行

著者 いずみ あさと  
泉 麻人

発行者 新田光敏

発行所 ソフトバンク クリエイティブ株式会社  
〒107-0052 東京都港区赤坂4-13-13  
電話 03-5549-1201(営業部)

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

イラスト 蛭子能収  
デザイン スタジオ・ギブ  
本文組版 谷敦

---

落丁本、乱丁本は、小社営業部にてお取り替えいたします。

定価は、カバーに記載されております。

本書に関するご質問等は、小社第2書籍編集部まで  
必ず書面にてお願いいたします。

「お約束」考現学

泉 麻人





## 目次

- 1 “交通ルート”の話題 7
- 2 人間ドックの流儀 15
- 3 スポーツ中継の常套句じょうとうご 23
- 4 ケータイまわりの掟 31
- 5 いまどき言葉の考察 39
- 6 冷し中華、はじめました。 47
- 7 昭和三十年代話、のお約束 55
- 8 痴漢と痴女をめぐる話 63

- 9 旅慣れた人、への道（機内編） 71
- 10 旅慣れた人、への道（旅行地編） 79
- 11 中年世代のクラス会流儀 87
- 12 車内でモノを食べる、ということ 95
- 13 エレベーター空間考 103
- 14 ダフ屋いま昔 III
- 15 テレビ番組タイトル考 118
- 16 ぴいちなギャル雀荘 125
- 17 「旅情を誘われる」瞬間 133
- 18 お天気コトバの世界 141

- 19 現代甘辛問答 149
- 20 お店の呼び文句 157
- 21 露天風呂付個室、の誘い 165
- 22 祭りばやしの町 173
- 23 三行風俗広告の文法 181
- 24 テレビ業界人のお言葉 189
- 25 ニッポンの年末的風景 197
- 26 タクシーまわりの掟 205
- 27 ベトナムの街道風景 213
- 28 北朝鮮の「国際研究員」 221

29 「昭和歌謡」タイトル考 228

30 カラオケの罫 236

「あとがき」のお約束 244

文庫版あとがき 247



## 1 “交通ルート”の話題

憲法や条例で決まっているわけではないが、いつしか暗黙の了解でそうなっている……という一種の風習が、世間にはいろいろと存在している。たとえばエスカレーターや動く歩道に乗るとき、関東ではいつの頃からか“右が追い越し車線”という風に認識されているようだし、係員のいないエレベーターでは、最初に乗った者が「何階ですか？」とエレベーター嬢の役回りをするなんてしきたりが定着している。

会社帰りに居酒屋へ寄ったとき、よほど寒い日でない限り、誰かがこう口火を切る。

「とりあえずビールですか……」

そういった、われわれが無意識に取り交している「お約束事」の諸々もろもろを提示し

つつ、人間の不思議、について考察していこう、というのがこのエッセイの趣旨である。前に掲げた事例については、おいおい深く検証していくとして、まずはこんな例を**組上**に載せたい。

人は会話に困ったとき、交通の話をしたがる——ということだ。

交通。といわれてもピンとこないかもしれないが、久し振りに催された同窓会とか、まださほど親交のない者同士が集まった呑み会のシーン、などを思い浮かべて欲しい。たとえば、スポーツやギャングブル、音楽……といった共通の趣味の話題で盛り上がっている場ならばいいけれど、そういうネタが思い当たらないとき、ある者が必ずこんな質問を投げかける。

「関根さんって、どのあたりに住んでんの？」

ここで関根が「赤羽の方……」などと答えたのを糸口に、以降、六本木のその店から関根の住地までの「交通ルート」を皆で検討することによって、沈んでいた宴席は俄かに活気をとり戻す。

「と、やっぱ日比谷線で恵比寿まで出て埼京線ですか」とある者がいい、「いや、埼京線は本数少ないから、結局、池袋まで山手使った方が早かったりするんだ



よ」と、もう一人が指摘する。しばらく隅っこの席で、寡黙に手酌酒をやっていた越智という男が、ここで「南北線」というルートの存在に気づいて話題に食いこんでくる。

「ここだったら、芋洗坂下って、麻布十番から南北線って手もある。関根さんちって赤羽岩淵の方でしょ……」

「ドア・ツー・ドアってやつですね」別に皆、関根という男の「帰りの足」などどうでもいい問題なのだが、なぜか真剣にアクセス論議をやりとりしている。南北線、という格好のルート提案をした男は、ゲームの勝者のように得意満面の顔つきを見せている。

そんな“交通ルート”の話題を機に、土地にまつわるちょっとした名所や史蹟を語り出す者もいる。

「赤羽岩淵っていったら、有名な造り酒屋があるところでしょ」

「小山酒造っていうんです。都心で唯一、地酒造ってる酒屋です。うち、あそこの裏方のマンションなんですよ」

と、お膝元ひざもとの関根がうれしそうに解説をする。

「ま、東京のホント、さいはて“みたいなところですけどね”

こういう、わが住処すまかの話になったときに、「さいはて」とか「チベット」などと田舎性を強調しながらへりくだるのも、大人の一つの社交辞令といえるだろう。田園都市線沿線の、たまプラーザとか青葉台とか、そういった恵まれたイメージの強いベッドタウンに住地を構える者は、謙遜けんそんの意味もこめて、とりわけ田舎性を主張したがるものだ。

「ボクらが越してきた十年前は、まだ裏山でタヌキが出たんですよ」

「いまでもね、近くの林で子供がクワガタ採りやってますからね」

三十年前ならばともかく、いまだきのたまプラーザあたりに、タヌキやクワガ

タがウヨウヨいるとは思えないが、郊外に住居をもつ人間というのは、そんな自然豊かな時代のことを、ことさら強調する傾向がある。

だからといって、「そりゃ、不便な土地ですね」などと合いの手を入れてはいけない。「タヌキが出たんですよ」と語っておきながら、一方で地下鉄一本で都心へアプローチできる便利さ、などを誇示したがつているのだから。

それは、世田谷の成城あたりに居を構える人に、「山の手の一等地じゃないですか、リッチですねえ……」などと話を振ったときのリアクションも一緒だ。そういう方向でもちあげると、必ず彼らはこう切り返す。

「成城たって、ウチのそばの祖師谷大蔵の商店街のあたりは古い豆腐屋なんかがあってね、けっこう下町っぽいですよ」

ふだんは「あの通り、ごちゃごちゃしててやーね、早く再開発されてヴィトン・グループのビルでも出来ないかしら」なんて思ってるコマダム系の夫人も、こういうときだけ「下町っぽさ」を謙遜の武器に使ったりする。山を潰して建てたマンションがへ豊かな杜もりのなかの永住の邸ていなんて広告を出すのと同じで、この種の“わが町自慢”というのは、実に現金なものなのだ。

さて、先の「交通ルート」の話題になったときに、あえて無知のふりをして相手の話を膨ふくらませる術もある。

「すると関根さん、赤羽岩淵のお宅から虎ノ門のオフィスまで通うっていうと、どうやって……」

「南北線で永田町まで行きましてね、ホラ赤坂見附から銀座線に乗りついで……」

「あ、そうか！ 永田町と見附と駅つながってるんだ」

「あそこの長いエスカレーター、しこしこ乗り歩いていくんですよ」

なんて調子で話は展開していく。さほど親しくもない男が、どこの地下鉄駅で乗り換えしようと勝手だが、都心の地下に複雑に張り巡らされた地下鉄線のルート推理というのは、会話が沈滞したときに、なかなかもつ、ネタなのである。たとえ永田町や日比谷駅の中継事情に通じていても、わざと知らない振りをして相手の交通ルートを伺うかがってやる——というのも大人の嗜たしなみといえましょう。皆、意外な乗りつき方を発表したくてもうずうずしているのだ。

とはいえ、こういう「効率的な交通ルート談義」というのは、あくまで沈滞し

た座の場つなぎ程度のもので、宴席がハネた後まで引きずってはいけな

店を出した後、「じゃ私はこれで……」と六本木駅の方向へ向かおうとする関根を、事情通の越智が呼びとめる。

「関根さん、麻布十番から南北線使った方が早い、ってさっきいったじゃないですか。こっちですよ、ボクも四ツ谷の方だから途中まで一緒に行きましょう」

などと、実際の帰路まで他人にこと細かく指示されるのは面白くないものだ。関根としては、あまりソリが合わない越智と一緒に帰るよりは、一人文庫本をのんびり読みながら家路へ着きたい、と考えていた。会がお開きになった段階で、先の「どうやって帰るのが早いか」の話題は、すっぱりと忘れなくてはならない。そしてまた、久し振りに対面した場で、以前と同じような交通ルートのやりとりが取り交される。

「関根さんって、どのあたりでしたっけ？」

「赤羽……」

「じゃここだと麻布十番から南北線で……」

「南北線って、いま武蔵小杉の方までつながってんですよね」

「ウチの方も随分アクセスが良くなりました」

日夜、こんなどうってことない会話によって、宴席はつつがなく進行しているのである。



## 2 人間ドックの流儀

恒例の「人間ドック」に行ってきた。行ってきた、という表現はおかしいかも知れないが、何年か定期的に受けていると、年始のお宮参りのような意識になってくる。僕の生まれ月は四月なのだが、この十年来、だいたい誕生日の直後に検診する、という習慣が定着している。

誕生日の頃にドック入りする、という人間は僕のまわりにも多い。そういう呼びかけをしている病院やクリニックの広告も見かけるし、まあこれは単に「覚えやすい」という理由だろう。三十過ぎの女性が「毎年、誕生日には自分へのごほうびとして（ ）するんですよ」なんて物言いをするところがあるけれど、「人間ドック」はちょっと「ごほうび」という性格のものでもない。「いい結果」が出れば、確かにごほうび的なものになるわけだが、それまでは「入試」の前にも似た、